

アメリカのマジック専門誌「ジニー」は、2007年6月号の特集記事として、島田晴夫さんを取り上げ、多くの貴重な写真と19ページを費やして、その世界的に有名になった島田さんの成功の軌跡を紹介しました。

この小冊子は、その記事を「ジニー」発行人のリチャード・カウフマンの氏の許可を得てテンヨーで翻訳製作したものです。

島田晴夫さんは、15才で松旭齋天洋に師事、ステージに関する多くのことを学び17才でプロデビューを果たしました。その当時、両手に一瞬に8つの玉を現す、8つ玉はセンセーショナルなものでした。

その後師匠・天洋のすすめで、当時アメリカから帰国した石田天海師にもスライハンドの手ほどきを受け、19才で海外に渡ることを決意しました。現在はラスベガスで活躍、世界でもっとも有名なマジシャンの一人となりましたが、それまでの努力はたいへんなものでした。

島田さんは世界のマジシャンからも憧れの対象となり、アメリカのマジシャン・オブ・ザ・イヤーをはじめ数々の賞を受賞。日本でも天洋賞、石田天海賞を受けています。

この特集は、未来のスターを目指す日本の若いマジシャンを勇気づける最高の贈り物になると確信しています。

2008年9月  
株式会社 テンヨー

# 「島田晴夫」

ジャック・グリーンズパン：著  
加藤英夫：翻訳  
株式会社テンヨー：日本語版監修





## マジックの虜になった少年

島田晴夫と奥さんのキーリーの住む家に一步入ると、日本からアメリカにやってきたもつとも有名なマジシャンの家であることを、感じ始めるに違いありません。入り口を入った正面の壁に、大きな銅鑼がかけられている以外は、とくに普通の家と違いはありません。ところが隣の部屋から「クークー」という鳴き声が聞こえてきます。彼らはいつもは隠された存在ながら、島田が命ずるままに姿を現す鳩たちです。この家こそ、マジックの新しい形を一生涯求めてきた男の家なのです。

私たちマジシャンのたいがいそうであるように、島田のマジックへの興味は、予期できないときに始まりました。1955年、15才の島田は東京の学校に通っていました。あるクリスマスまえの冬の日、学校からの帰り道、彼はあるデパートのテンヨーのマジック売場の前を通りかかりました。そのときテンヨーの

ディーラーは、ハンカチーフのマジックを演じていました。彼はこのマジックに魅せられて、毎日そこへ通い、トリックを見抜こうとしました。彼はお金を持っていませんでしたから、それを買うことは論外でした。

1956年の夏になると、彼の我慢は限界に達し、母親を説得して小遣いをもらうことに成功しました。そしてすぐに売場に行き、そのトリックを買いました。もちろん代金を支払ったからには、ディーラーはサムチップの秘密を教えてくださいました。彼はそれから毎日のようにそこに通いました。今日の島田はニコッと笑ってそのころのことを、アクセントある英語で語ります。「ボクはマジックにとりつかれてしまったんですよ」私たちはそのフィーリングを知っています。彼は何回も実演を見て、上手にできるまでしっかり練習しました。彼にはうまくなるべき理由があったのです。母親にそのトリックをやって見せて、つぎのトリック、すなわち'四つ玉'を買うお金をもらいたかったからです。

テンヨーのディーラーは熱心な少年に対して、しかるべきことをしました。彼にアルバイトをもちかけたのです。「ボクは学校が休みのときにアルバイトをしました。どの売場でも、ディーラーがその場を離れたときは、ボクがカウンターの向こうにまわりました」当時テンヨーは6つのデパートに売場を持っていましたが、島田はすべての売場を経験しました。「ボクはすべての売場を経験し、それぞれのディーラーを見ることができましたから、色々なやり方を吸収することができました」これはなかなか良い学習方法でした。「そのころは、海外からマジック用品が入ってくるということはありませんでしたから、すべては国内で



上：17才、ビリヤードボールでデビュー（1958）/右：15才。練習風景



製造しなければなりません。ほとんど文献もありませんでした。まだ戦争が終わって10年しかたっていない時ですよ。アメリカの人が入手できるものに日本のマジシャンは手が届かなかったのです」

マジックは彼にとりつき、彼の生き方、彼の考え方を変えました。すべてがトリック中心になり、すべてがマジックを習得することにかかわってくるようになりました。「そのときボクは16才でしたし、タバコなど吸っていませんでした。でも商品に'火のついタバコの消失'というのがあって、そのマジックではタバコを吸わなくちゃならないので、トイレの中で練習しました。そのマジックをマスターしたいがために、タバコを吸うことが好きになってしまいました。ある日の昼休みに、デパートから外に出て、地下鉄のベンチでタバコを吸っていたら、警官がやってきま

した。ボクはどう見ても、20才以上には見えませんから、彼はボクを警察に連れていきました。ボクはデパートのマジック売場で働いているので、あえてタバコを吸う必要があるのだと説明しました。すると警官は、公衆の面前では吸わないようにと注意しただけで、無罪放免としてくれました。これがボクが警察と関わった唯一の話です」

このマジックに対するまじめさは、彼の日常を司ることになります。「ボクはまじめな少年でしたから、マジック売場では働きづめで、家に帰れば2時3時まで練習をしました」それから布団に入っても練習を続けました。「布団の上だと、ボールを落とすでも転がらないので都合がいいんです」このようにして、彼の得意芸となるボールの手順が次第にまともになりました。1日に30分しか熟睡しないなどということもありました。「テクニックを練習するだけじゃなくて、手順を作ろうとしていましたから、いざ考え始めたら眠るどころじゃないんです。そのうち母が寝るころには、明かりを消さなければなりません。音をたてるわけにもいかないので、ボールを持たずにジェスチャーだけでやったのです。後日、母が言いましたよ。ボクの頭がおかしくなったんじゃないかって。母は暗闇の中で見ていたんですね。とても心配したそうです」

## ‘八つ玉’の完成

島田は初めから、スライハンドで不思議を生み出すことに取り組みました。ですから、イリュージョンにはあまり興味ありませんでした。そのあとの1年間、彼は彼のアクトを相当に磨き上げました。しかし彼の先生である松旭齋天洋は、どちらかというといリュージョニストであり、スライハンドは教えてもらえませんでした。

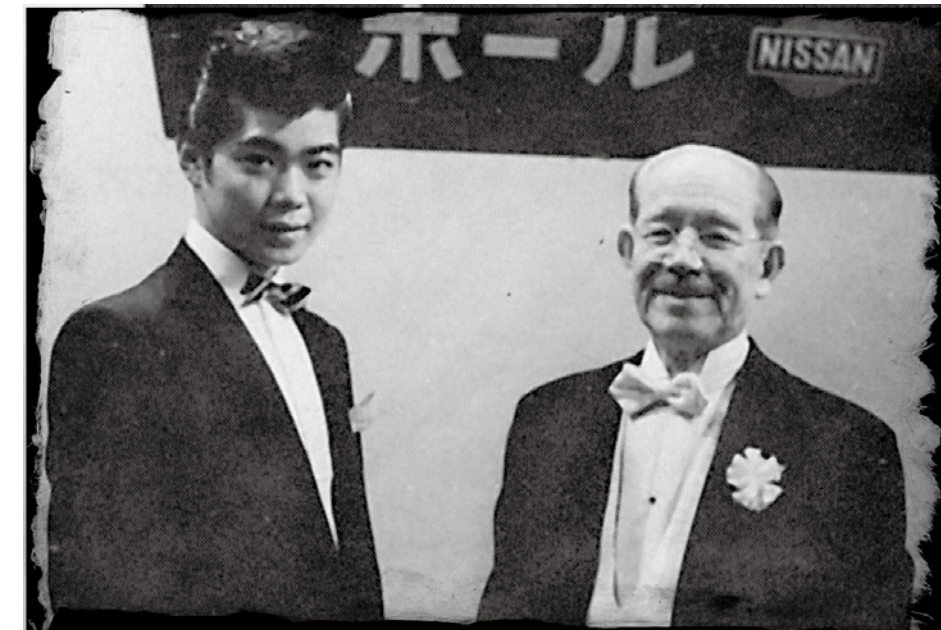


18才。東京、テンヨーのマジック売場で（1959）

まさにこのとき島田は幸運に恵まれました。「1957年に石田天海がアメリカから日本に帰ってきたのです。天海は30年アメリカで生活したあと、当然ながら、余生を生まれ故郷で暮らしたいと思っただけです。ボクはイリュージョンよりスライハンドに興味を持っていました。そして天海はスライハンドの名手です。天海が帰国すると、天洋先生はすぐ、天海先生に習いなさいと勧めてくれました。ということで、天海が私の先生になりました。週に1日、天海先生のもとに通いました。ボクはほんとにラッキーでした」そのときの島田は17才です。

天海に初めて会ったとき、島田は印象的なものを見せた方がよいと考えて、母親に気遣いながら練習を重ねてきた、あのボールの手順を見せました。「天海先生は、ボクのボールの手順を見て、感銘を受けたようでした。それはボクが自分で考え出した、ひとつのボールに2個のシェルをはめて、1個のボールをいつべんに4個に増やすやり方が含まれていたからです。ボクは右手だけでやりましたが、先生は即座に"それを左手でもやったらどうだい"と言いました。これは先生が左利きだったから気づいたのかも知れません。右利きのボクは左手でやることなど思いもつきませんでした。ボクが"そうすると、いつべんに8個出せますね"というと、"その通り、両手いっぱい

に



石田天海（右）と。（1958）



出せるということは、すごいことじゃないか"と言いました。左右の手に1個ずつ持たれたボールが、瞬間的に4個ずつになるのです。このやり方は、天海先生のアドバイスがあったからこそ生まれたのです」

彼の完成した手順では、合計35個のボールが出現し、その間にカラーチェンジも起こります。彼は自分で考えたテクニックを使い、それらと今まで学んだことを組み合わせて、新しいマジックを生み出したのです。

シェルからいちどに1個のボールを出すのではなく、彼のテクニックは、いくつかのボールをあっちこちに運ぶものでした。「カラーチェンジのときは小指をこんなふうに使わなくちゃならないですよ」と言って、現在66才の島田は、まるで17才の少年のときと同じように器用に指を動かして見せてくれました。「17才の少年がですよ、誰もい今まで見たことのない1個から4

ラーで稼げるのはそれほどではなかったのですが、これは助かりました」しかし、あまり稼げないことは問題ではありませんでした。彼は将来絶対に成功すると信じていましたから。問題は、それを母に納得させることです。「ボクは母にプロマジシャンになると告げました。すると母は”絶対にだめ”と言いました。ボクは決心していました。プロになるしかなかったのです。そうでしょ。ボクはプロになると母に言い続けました」

とうとう母は言いました。“天洋先生に聞いてみるわ”。母は先生に言いました。“息子がプロマジシャンになりたいと言っているんですが、彼はプロとしてやっていけるでしょうか”。そのような質問に誰が責任を持って答えられるでしょうか。プロマジシャンになれるかどうか保証なんてあり得ません。先生は言いました。“私がおきり言えることは、私の弟子の中では、彼がいちばん才能があるということです”と答えました。先生が言っ



島田：「1958年頃、TVコマーシャルで初のマジックの生出演をしました。当時、任天堂がディズニーキャラクターのトランプを発売、コマーシャルでマジックを使う事を考えました。一方テンヨーでは、ファンカードを任天堂に依頼していました。その関係で任天堂は、最良のスライハンドマジシャンを推薦してほしいと依頼、テンヨーでは私を推薦しました。私は約3ヶ月間毎週、大阪のテレビ局へ通い、生CMに出演しました」

もボールの手順をやらせてもらいました。でもそれは、ボクのショーという感じではありません。とても短い演技だったので、カードを加えましたが、それでも6分です」

6分のアクトは島田のアクトとしては短か過ぎました。それを島田も知っていました。それでもそれは続けてやらせてもらえ、それなりにボールの島田は知られていきました。しかしプロの職場でやるうちに、自分のアクトがプロ向きではない問題点がわかってきました。「ナイトクラブやキャバレーでは、前だけでなく、横にも客がいることがほとんどです。ボクのアクトはアングルに弱くて、とてもプロとして通用するものじゃなかったんです」

島田は、いまやっている以外のことをやらなければいけないことを知っていました。それまでに彼は4年間天洋と仕事をしました。天海から学び、自分の手順を完成しましたが、それだけでは不十分でした。もっと必要でした。しかし情報入手に制限があった時代に、やるべきものを見つけるのは困難でした。「ボクたちは海外から入手することができなかったから、自分で何かを生み出す必要がありました。それはすごいことです。あそこにボールがありますが、(テーブルに置いてあるボールを指さして)、あれを心の中で色々やることを想像するんですよ。何もお手本もなく、コピーするものもなく、ただただイメージネーションを働かすだけです。そんなやり方が、その当時の日本のマジシャンたちの誰もがやっていたことだと思いますよ。私が35個のボールの手順を生み出したのも、イメージネーションのおかげだったんです」

島田は、現在の何でも入手できる時代のことに言及しました。そして首を振りながら言いました。「ときには、実物や映像などで見ないで、本で読む方がよい場合があるのです。ビデオを見るよりも、本で読んだ方が自分のイメージネーションを働かせることになるんです。これはある意味では、クリエイトの作業なのです。日本のマジシャンはずっとそれをやってきたんですね」

## 天海から学んだこと

ここに、島田のマジックに対する哲学が見えてきます。彼は天海の少しと天洋の少しと、それらに自分のものを多く組合せ、いままでとは違うスライハンドの形を見つけました。「天海からスライハンドを学んだことは大きかったです。彼のスライハンドには巧妙性が含まれていましたから。先生は言いました。“マジックはジャグリングじゃない。だからテクニックを見せるんじゃない。テクニックを隠さなくっちゃいけない。だから派手な意味のない動きをしちゃいけない”」天海が日本のダイ・バーノンだと考えたら、この考えは、バーノンの”ビー・ナチュラル”に通じるものがあります。技術的なものは密かなる武器として使うということです。島田の舞台での演技を見れば、この考え方が忠実に守られていることがわかるはずです。余分な動きはありません。すべてがクリーンです。「派手な動きをしたとしたら、“彼は何かをやろうとしているな”と感じさせるだけです。マジシャンは驚かすのが仕事なのですよ」

政府の制限が緩和され、島田はアメリカのマジックの本に手が届くようになりました。そして彼は、ダイ・バーノンのカードマジックと出会うことになります。「バーノンの本を日本で初めて翻訳し始めたのは、高木重郎氏でした。ボクは高木さんの翻訳からカードマジックを学び、そしてその虜になりました」しかし天海から学び、本を通してバーノンから学んだ島田は、クロスアップマジックが、彼の成功への道につながっているとは思いませんでした。「当時は、ボクの心は舞台上でのマニピュレーションにありました。クロスアップマジックは目の前で奇蹟を起こしますが、舞台マジックとは違うものです。舞台マジックは典型的なアートフォームです。ただトリックをうまくやればよいというのではなく、ひとたび舞台に登場したら、あなたのポディランゲージ、顔の表情、そしてあなたの表現が大きな意味を持つてくるのです。そのようなことが舞台マジックのすべてであり、だからこそボクは舞台で演じたいのです」

そのようなアートとしてのマジックを愛したのは、島田だけではありません。昭和天皇もマジックを愛し、1960年における彼の還暦祝いにおいて、松旭齋天洋とその愛弟子は、天覧の荣誉に



島田晴夫17才

個へ増やすのをやったんです。それがボクのデビューでした。当然のようにセンセーションを起こしました」なお、島田のボールの手順は、GENIIの1985年11月号に完全に解説されています。「The Greater Magic Video Library, Vol.3」にも含まれています。

## 母の心配

しかしながら、マジック売場のディーラーから、プロマジシャンへの道は平坦なものではありませんでした。最大の障害がありました。それは母の存在です。

島田は小さな家族の一員でした。彼の父は彼の人生に関わっておらず、母が島田と妹のめんどうを見てくれました。「ボクの母は父と別れたので、自分で働かなければなりません。ある程度金に余裕があるときは、子供を援助してくれました。ディー

たのはそれだけです。その言葉を聞いて、私はさらに決心を固め、とうとう母もあきらめたのです」

島田はただプロになるだけでなく、プロとして成功してみせると母に約束しました。それでも説得はまだ必要でした。「当然ながら、それで母が安心するわけではありません。当時は、マジシャンという職業が人にどのように見られるかも不安でした。そしてプロへ一歩踏み出したものの、まだまとまぬ収入を得られるというのは、鳩出しを始めるもっと先のことでしたよ」

## 初めて舞台に立つ

17才のとき、島田は天洋が地方興行を行うとき、イリュージョンのアシスタントとして手伝い、そしてデビューをはたしました。「天洋先生が仕事があるときは、いつもついていきました。ボク



松旭齋天洋(左)と島田晴夫(1978)



あずかったのです。島田は35個のボールの手順を演じました。この時点で、島田には2つの選択肢があるように見えました。天海のクロスアップマジックを継承するか、それとも天洋のイリュージョンを継承するかという。19才の少年には、どちらも納得できるものではなく、かといって、4年マジックと取り組んできた彼には、進むべき道は見えませんでした。何かを変えなければいけないことだけはわかっていたが。

## チャニング・ポロックの衝撃

「19才のときに、'ヨーロッパの夜'という映画がやってきました。この中で、チャニング・ポロックを見たとき、ボクは頭をなぐられた気がしました。ポロックはボクのマジックに対するイメージを根底からくつがえしました。それまでは、トリックの不思議さがいちばん重要なものだと考えていました。当時ビデオというものはありませんでしたから、ボクは映画館に9回通いました。たった4分半のアクトを見るために9回入場したのです。ボクにはたいへんな出費でした。他のマジシャンも何回も見たようです。何回も見るとつれて、わかってきたことがありました。ボクがポロックを見ると、マジシャンとしては見ていませんでした。まるで映画スターがマジックをやっているようでした。カリスマ、パーソナリティ、エレガント、それらをすべて感じさせる、まるでマジックの聖像とも思えました。ボクは、彼からパーソナリティとカリスマの重要性を学びました」

この映画は2つの点で、これ以降の島田のマジックの進む方向を変えました。第一に、明白なことですが、鳩出しと取り組んだことです。第2に、キャラクター作りを始めたことです。「この映画を見たあと、ボクは10羽の鳩出しを作り上げました。ポロックがどのようにやったか知る由はありません。でもそれはどうで

もよかったです。まえにも言いましたが、当時は情報が入りませんでした。だからギミックも何もかも自分で考えなければなりません。結果的にはポロックとはだいぶ違う鳩出しになりました。これは結果的には正解でした。1962年の時点では、すでにボクはベアハンドの鳩出しをやっていました。ケーンの上に鳩が出現する、1羽の鳩が2羽に分裂する、カードファンの上に鳩が出現するなど。その当時のマジシャンの鳩出しは、鳩を出してはつぎつぎとアシスタントに渡していくだけでした。ですからボクは、鳩がアシスタントからボクに戻ってくるようにトレーニングしました。それらは1962年までに案出したことです」

ポロックは島田の第2の変貌に影響を与えました。キャラクター作りです。20才の若者には、キャラクターを作るなどということは思いもよらないことです。「ボクが鳩出しを始めたころは、ただミステリアスに、ただエレガントに演じようというだけでした。それがポロックから得られたことでしたから。長い間、ポロックにあこがれ続けてきたボクに、奇蹟のようなことが起こりました。とうとう1971年にアメリカで'イツマジック'というショーに出演できることになりました。このときの鳩出しをポロックが見ていたのです。しかも演技のあと彼はすぐにボクの所にやってきて、ボクのマネージャーをやりたいと申し出たのです。そのとき彼はもう現役を引退していました。この申し出ではまさにアンビリーバブルでした。いずれにしてもエンタイナーとして成功するには独自のキャラクターが必要です。天海もキャラクターをもっていましたし、多くの偉大なマジシャンがキャラクターを持っていました。そのような多くの偉大なマジシャンの中で、何とポロックがボクのマネージャーをやってくれるというのです。鳩出しをやるボクが、どうしたらポロックのイメージをボクから分離することができるでしょう」

その考えが、島田に新たなひらめきを与えました。それはトリックについてではありません。「ボクはただトリックだけをうまくやりたいんじゃない。それは多くのマジシャンが望むところだけれど、いくらトリックがうまくできたとしても、他人が同じトリックをやれ



NHKに出演 (1960)



浅草にて。ゾンビボールを演じる島田。(1958)



19才。最初の鳩のアクト (1960)



大阪にて (1959)

ば、そこでオリジナリティは消えてしまいます。ボクはそんなレベルにはなりたくなかった。このことは、ボクがDVDで鳩出しをそっくり教えてしまったことにも関係しているんです。ボクは全部教えてしまっても、ぜんぜん困りませんでした。いくら教えた人がうまくやったところで、ボクのキャラクターでボクの見せ方をすることは不可能なのですから。このことは、ポロックから教わりました」

## キャラクターの創造

'イツマジック'への出演は、そのあとのマジックキャリアスルでの仕事につながりました。しかしその時点では、島田はたんにストイックな日本人という以外のキャラクターは持っていませんでした。彼は毎回演技を終えたあと、観客の声に耳を傾けました。「彼らの言ったことのほとんどは、ボクの鳩のテクニック以外では、ボクの顔の表情についてでした。"彼の顔を見た。あの目つきすごいじゃない。マジックもすごいけど、あの目に魅了されたわ"。そのような声を多く聞いたので、当然ながらそのことについてよく考えました。そして目の表情を研究し、練習しました。ボクは舞台ではしゃべりません。一生ずつとしゃべりませんでした。でも日本人ですから、そのことを表情と動きで表現すべきだと結論しました」

「アメリカ人は、フジヤマ、ゲイシャ、ニンジャ、などに魅了されています。ボクはもちろん、ゲイシャにもフジヤマにもなれません。いったいボクの顔がイメージするものは何なのだろう。そうか、サムライも日本のイメージとして魅力的なものです。アメリカ人はサムライがどんなものかよく知らないから、そのことが神秘的な雰囲気を生み出します。ということで、ボクはサムライのキャラクターを取り入れることにしました。そして髪をいまのように長く伸ばし始めました。サムライはミステリーです。マジックもミステリーです。そう、これしかない。そしてこの決断が、人々がボクを他のマジシャンと区別できるものになったと確信しています」



島田：「19才のとき、私はポロックのダブルダブプロダクションを行いました。しかし2羽ではなく、4羽を使って行ったのです。私の知る限りそれまでそんなことを行った人はいませんでした。それをした理由は、鳩のアクトを天洋先生に見せたところ、もし三越のテンヨー大会にでたいならば、ポロックを超えなければならないといわれたからです。ポロックは7羽の鳩を出現させましたが、10羽出してみなさいと言われました。ひとつの可能性としては、もう一方のソデにも鳩を隠すことでしたが、そうしても8羽しか隠すことができませんでした。そこで2羽出しを4羽で行うことを考えたのです。そのときは、先生の思いに応えたい一心でした」





## オーストラリアへの旅立ち

ここまではかなり話の途中を飛ばしてきましたが、その間に島田は3つの大陸でマジックを演じ、その間に結婚もして、1人の娘ももうけました。

1960年の初めに話を戻しましょう。鳩出しが次第に改善されつつあるとき、仕事も入り始めました。「当時、日本では鳩出しをやるマジシャンはいませんでした。ですからナイトクラブからどんどん仕事が入ってきました」そして島田は大きな転換期を迎えます。時は1964年、東京オリンピックが開催された年です。日本が世界にアピールする年でした。欧米人が日本の文化を見たいという意欲に、島田は恩恵を得ることになります。「オーストラリアからきたショーのプロデューサーが、オーストラリアで日本人のショーの興業を打とうと思立ちました。彼らは映画会社の東宝と契約を結びました。東宝は東京のど真ん中に、日劇という一流の劇場を所有していました。その劇場では、300人もの踊り子のレビューショーが行われていました。そのショーの一部をオーストラリアに持っていくにしても、当然ながらスペシャルショーが必要です。私がナイトクラブで仕事をしていた夜、そのプロデューサーがそのナイトクラブにやってきました。私のマジックを見た彼はたいへん気に入って、東宝に連れていってくれました」このようにして、島田は東宝のオーストラリア公演に組み込まれたのです。これは島田にとって、母国から遠く離れた海外での初めての仕事です。この仕事は、彼の運命の流れを変えることになります。

「40人の踊り子と私のスペシャルショーは、アデレード、メルボルン、シドニー、ブリスベン、パースという5大都市で大々的に興行されました。3ヶ月半でしたが、大成功でした。5月に日本に戻りました。私には天海から聞かされた、アメリカに対する夢がありました。そして日本にはいるものの、アメリカ軍基地のクラブでよく仕事をしました。ですからアメリカ人の生活を想像したり、オーストラリアでの経験を重ねては、夢は膨らむばかりです。なにせ彼らはよく拍手をしてくれます。日本のナイトクラブやキャバレーでは、目的はホステスですから、ろくに拍手をしてくれません。私は日本を出るべきだと思いました」

しかし島田にとって、アメリカへの道は簡単ではありません。オーストラリア経由で行けないかと考えました。オーストラリアで何人かの人と知り合いになりました。もっとも近くに適切な人がいました。「ボクはオーストラリアでディアナと出会いました。彼女はある劇場で働いていたのです」日本に帰ってから4ヶ月後に、島田はふたたびオーストラリアに向かいました。こんどは1人です。安い貨物船の旅は15日もかかりました。1965年9月に貨物船がシドニー港に着いたとき、ディアナが迎えました。「ボ

Photo: Zakary Belamy

クはアシスタントが必要でしたから、彼女を呼んだのです。彼女は十分にきれいでした。アシスタントとして使えるに違いない。すぐにシドニーで仕事を始めようとしたのですが、ボクのビザはツーリストビザでした。オーストラリアで働くには、保証人が必要でした」たとえ保証人が得られたとしても、簡単な話ではありません。イミグレーションのルールでは、許可が出るまでは、日本に帰れというのです。すぐに仕事を始めたい彼には、有り難いルールではありませんでした。



トーキョーナイト、オーストラリアプリミエール (1965)

島田とディアナはこの問題を解決するために、弁護士に相談しました。「弁護士はすぐにたずねましたよ。"キミたち二人はどういう関係かね。たぶんいい仲なんだろう。だったら結婚すればいいじゃないか"と。ボクは答えました。"たぶんいつかはね。でもいまはまだ考えていませんよ"。そのころはボクの英語は限られていました。彼は言いました。"結婚するか、日本に帰るかのどちらかしかないね。奥さんがオーストラリア人でないと、イミグレーションはキミをけ飛ばすよ"と」

「この時点で、ボクは25才でした。大きな決断でしたね」彼の成功はオーストラリアで糸口が見えています。しかしオーストラリア人の連れ合いなしではその糸口も閉ざされ、振り出しに戻ってしまいます。これは自分だけでは決められないことでした。島田は「キミはどう?」とディアナにたずねました。彼女は即座に答えました。「いいわよ、結婚してあげる」と。彼女はボクを救ってくれました。二人は時をおかず結婚しました。1965年10月のことです。「結婚しなかったら、彼らは本当にボクを追い出したに違いありません」

結婚してオーストラリアにいられるということが、島田にとって絶対に必要なことでした。パーソナリティの面でもトップの位置にあり、テクニックの面でも彼に続く者はいませんでした。「ボクはそのころ、鳩出ししかやりませんでしたが、競争相手などいませんでした。ボクのスライハンドテクニックは、他のマジシャンからかけ離れていました。オーストラリアでは成功続きでした。テレビのメジャーショーのすべてに出演しました。シドニートゥナイト、メルボルントゥナイト、アデレード、ブリスベン、どの都市においてもです。オーストラリアを行ったり来たりしましたよ」その忙しかった時期は、ちょうど家を離れるのに都合のよい時期でした。「ディアナが妊娠していたんです。そして翌年の1966年9月に娘のリサが生まれました。ディアナが妊娠期間中は、シドニーのダンサーをアシスタントに使っていました」

その当時、いまもそうではありますが、シドニーは最大の都市のひとつでした。いくらでも仕事は入ってきます。とくに退役軍人のクラブに多く出演しました。それらの観客の多くは、戦歴20年を越えるベテランたちでした。「そういう人たちは普段は愛



島田とディアナ (1968)





Photo: Zakary Belamy

想がいいんですが、酒を飲むと戦争の話になり、私とトラブルが起ることがありました。私はたぶん、オーストラリアで初めての日本人エンタテイナーだったので。オーストラリア国内で日本人を見るのは珍しいので、話が高じてくると、私にからんでくることがあったのです。そういうときは、ディアナが助けてくれました。"何をこの人に文句言ってるの。戦争はずっとまえに終わったのよ。そのときこの人は4才の子供だったのよ"と

そんなことが3年間続きました。オーストラリアの大きな都市をめぐり、ナイトクラブで働きながら、赤ん坊の世話をする。「そして1968年という新年を迎える直前のことでした。メキシコからある歌手がきてショーを行ったとき、私がスペシャルゲストとして出演しました。そのときメキシコの行政官も同行してきて、ショーのあと楽屋で紹介されました。あきらかに彼は私のショーが気に入ってくれて、褒めてくれました」二人はすぐに親しくなり、お茶を飲んだり、食事をするようになりました。島田はこのチャンスを見逃してはならないと思いました。「ボクはオーストラリアが英語圏だから来たのです。でも本当の行動を起こす地からは遠く離れています。ボクの目的地はアメリカです。どうすればアメリカへ行けるのでしょうか」

## アメリカに近くて遠い国

その答は、スペイン語を話す新しい友人からもたらされました。「メキシコはアメリカに近いですが、アメリカに知り合いはいませんか」たずねると、彼は「アメリカに知り合いはいないけど、メキシコに来るならビザをなんとかしてあげる」と言いました」とうとう目的地のすぐそばまで行けると島田は思いました。しかし

実際は、「近くて遠い」とはこのことです。結局行政官がくれたのは、ツーリストビザでした。ただ入国できるだけのものです。それでも現在より距離が近くなることは間違いありません。島田とディアナが決断するまでに時間はかかりませんでした。「オーストラリアで3年暮らしたおかげで、英語がしゃべれるようになりました。人々と話ができるようになっただけでも前進じゃないか。だったらボクとディアナはトライするしかない。ディアナも同意してくれました。ということでメキシコに行くことになったのです」

1968年3月、鳩たちと娘のリサを抱えて、彼らはメキシコ行きのチケットを買いました。40年まえの海外旅行は今日のようなものでは

ありません。シドニーから地球の反対側への旅行は、もちろん直行便はありません。「それは苦痛といえる旅でした。まずフィジーへ行き、つぎにタヒチ、そしてハワイ、さらにロサンゼルス、そしてメキシコシティーという乗り継ぎの旅でした。ロスでは8時間もの乗り継ぎ時間がありましたが、彼らにとって初めてのアメリカでの滞在時間は、優雅なものではありませんでした。

メキシコシティーに到着したからといって、状況が良くなったわけではありません。「メキシコシティーに着いたのは朝の4時でした。真っ暗でした。そして静かでした。そのとき時おり聞こえてくる声は、すべてスペイン語でした。メキシコでは、英語が通用しないということに、はたと気づきました」

「ボクは何を考えていたんだ。もちろん仕事も決まっていたわけではなく、ホテルさえ決まっていなかった。タクシーに乗って適当なホテルに行ってくれと言いました。翌朝目がさめると、ディアナと目が合ったとき、「いったいどうしようか」と言ったものです」彼は仕事を見つけるべきなのはわかっていました。オーストラリアで何人かのメキシコ人歌手と知り合いました。そこで1人の歌手に電話をかけてたずねました。「誰かエージェントを知っていますか」と。

何本かそのような電話をかけてもうまくいかず、島田の足は日本領事館に向かいました。「ボクがマジシャンだということを説明して、芸能エージェントを紹介してくれないかと頼みました」彼らはそのようなエージェントは知りませんでしたが、日本が好きな歌手を紹介してくれました。日本にも何回か行ったことがあり、重要なことは、英語が話せるということでした。

「その歌手は、ボクに1人のエージェントを紹介してくれました。そしてそのエージェントが、ある劇場の興業主とコンタクト

がありました。テアトロブランキータという劇場です。パリでいえばオリンピア劇場のようなもので、メキシコでNo.1の劇場です。彼はボクにオーディションを受ける必要があると言いました。「いいですよ、劇場でやるんですか」とたずねると、「いやその必要はない、家に来てくれと言いました。彼の家は大きな家で、彼の8人の子供と何人かの使用人も観客になりました。私の鳩出しはもちろん喜ばれました。"ノー"と言う理由はありません。すぐに契約してくれました。6週間、1日80ドルでした。1週間では560ドルになります。メキシコでは大金です。エンタテイナーに対してはトップクラスのギャラでした」

それでもまだ、島田はアメリカにちっとも近づいてはいませんでした。成功していたかといえば、イエス。シドニーより近いといえば、イエス。でもアメリカではありません。島田はメキシコで2年を費やしました。その間、色々なことをやりました。田舎のサーカスに出たかと思うと、彼自身の毎週のテレビ番組もありました。しかしそれらはレベルから見たら、6年まえに日本を離れたときのレベルより高くなったものではありません。何かの

突破口が必要でした。

有り難いことに、彼はマジックの世界では友人がつくりやすい性格でした。「ボクはメキシコシティーでスライディーニとゴールドフィンガーに会いました。ボクは言いました。"アメリカに行きたいんだけど、どうするのがベストでしょうか"。彼らがアドバイスできたのは、とても小さいことでした。"ミルトとビル・ラーセンが1年にいちど、イツマジックっていうショーをやってるよ。手紙を書いたらどうだい"、というものでした」魔法の言葉が必要だった島田にとって、このたわいもないアドバイスこそ、魔法の言葉だったのです、アメリカに入るための。

## 傘のアクトの発端

これから起こることを理解するためには、少し話を戻す必要があります。メキシコ滞在中、英語圏での仕事のチャンスを求めて、島田は日本とロンドンに行きました。それまで鳩出しは受け入れられていて、イギリスでも受けると思っていましたが、しかしロ



Photo: Zakary Belamy





メキシコのテアトロブランキータ (1968)

ロンドンのエージェントには、「何であなたは日本人の着るものを着ないのか」と言われました。そしてチャンスをもらえませんでした。マジシャンになって初めて、過去のマジシャンから受け継いだ燕尾服が彼の邪魔をしたのです。

「ボクはロンドンに3ヶ月仕事なしでいました。どうしようと

悩み、何か日本的なものでも見つけようと、中国雑貨の店に行きました。そして3本の傘を買いました。その時点では、まったく使い道など考えていませんでした。もうロンドンに来て3ヶ月、持ち金も底をつきかけました。しょうがなく最後の金でメキシコに戻りました。メキシコでチャンスを待つのは2度目です。近くて遠いということをつくづく感じましたね」3本の傘を抱えて、彼がすでにステータスを築いた地に戻りました。そこで彼は、傘の使い方を追求しました。少しずつ、テレビの番組で傘を使ってみました。傘というものが現れる理由づけを説明する必要を感じました。「ただ出現しただけでは、完成された演技ではありません。何かユニークな演出が必要でした」

## アメリカで初めての仕事

必要は発明の母といえます。島田はユニークな何かを見つける模索を続けました。そして傘のアクトをラーセンの「イツマジック」に売り込みました。「それはボクの初めてのアメリカでの仕事でした。このアクトはいままでやったことがありません。まるで神経質になっていました。でも最初の半分を何とかやり終えました。驚くことにかなり受けたようです。確かにいままでないマ



下・左下：メキシコのテレビ番組に出演。傘を初演 (1970)  
左上：イツマジックに出演 (1973)



ジックですから。それで自信を持ちました」

いちどアメリカに入ったからには、もうメキシコには戻りたくありませんでした。問題は、いつも外国に入ったときに起こる問題でした。彼はツーリストビザで入国したので、仕事をする権利はありませんでした。そこでラーセン氏に頼みました。「ボクをマジックキャッスルで使ってくれませんか」ラーセン氏は言いました。「もちろんだとも。でもキミの傘のアクトはマジックキャッスルセラーではできないよ。天井が低いから。それが問題だね」と。「そのころまだマジックキャッスルには大きい方の劇場であるパレス劇場はありませんでした。そこでラーセン氏は、1週間後にボクの鳩出しを使ってくれることになりました。しかし彼は私の鳩出しを見たことがあるわけではありません。キャッスルでの初演の日、彼がボクを紹介してくれて、彼はボクの鳩出しを初めて見ました。彼はひっくり返るほどに驚きました。こんなことをできるとは思っていなかったんです」

## ビザの問題

しかしマジックキャッスルで仕事があるということは、家族がアメリカにずっと滞在できる条件ではありませんでした。彼は著名人から、彼のマジックに対する評価を集めました。マジック界以外からもです。ジョニー・カーソンが1971年の12月に、トゥナイトショーに出してくれました。「ナショナルテレビジョンのメイン番組で、しかもカーソンがたいへん気に入ってくれたんです。それはとても興奮することでした。カーソン氏もボク自身も、あの番組についての好意的な評判を集めました。とくにマジシャンからのものが多かったです。電話、手紙、それらはすべて、「島田って誰だ」というようなものでした。たぶんこれでアメリカにいられると感じました。そしてビル・ラーセンに、これ以上ツーリストビザではいられないので、どうしたらワーキングビザが取れるかとたずねました」

ビルは最大限の協力をしてくれました。それは「ヤマシロ」という日本レストランの料理人として島田を登録したことです。彼はそのレストランでいちども魚をさばいたりはしませんでした。そのレストランの下にあるマジックキャッスルで毎晩のように鳩を出現させたのです。この便法は少しの間はうまくいきました。

しかし島田とディアナの名前がイミグレーションの国外追放リストに載ってしまいました。そのときすでに島田はマジックキャッスルのメンバーである弁護士のリニー・ヘッカーに相談していました。島田のマジックを見て、彼はひとつのプランを生み出しました。彼はアメリカのマジックの世界で、唯一の東洋人マ

ジシャンであると証明することにしたのです。そして彼は島田を支援する人から手紙を集めました。ダイ・バーノン、マジックキャッスルのディレクターたち、ケリー・グラント、そしてジョニー・カーソンなど。そして東洋人マジシャンの資料も集めました。チャン・リン・スー、フー・マンチュー、オキトなど。彼らの資料をすべて提示し、彼らが本当はすべて白人であることを示したのです。島田こそ真の東洋人マジシャンとして貴重な存在であると主張したのです。

この作戦はうまくいって、国外追放のリストから外されました。しかしそれでもなお、グリーンカードが発行されるまでは働くこ



Photo: Zakary Belamy

とができません。カードは1973年に発行されることになっていました。島田はなかなか発行されないグリーンカードを待ちきれずに、1973年の秋にはフランスで仕事することになりました。パリのオリンピア劇場から誘いを受けたのです。しかしまたもトラブルが起こります。パリの仕事を始めてから2ヶ月後に、アメリカのイミグレーションから、グリーンカード発行のためのイン





ドラゴンアクトの宣伝用写真 (1975)

デビューを受けるといつてきたのです。「でもオリンピック劇場との契約が残っているんです」と言うと、「その契約を飛ばさなにかぎり、キミはグリーンカードを一生もらえなくなるんだよ」と脅かされました。オリンピック劇場に相談すると、「必ず戻ってくる約束してくれたら、1週間なら休みをあげましょう」と言ってくれました。ということで、島田の代役としてフランス人マジシャンがあてがわれました。「ボクは朝の8時にアメリカに着きました。すぐにディアナとリサと落ち合って、イミグレーションに行きました。その日の午後には、ボクはパリに飛び立って、残りの契約を全うしましたよ」

## 一世一代の鳩のすり替え

アメリカに帰ると、トゥナイトショーでの2度目の出演が待ちかまえていました。ところがまたもやトラブル発生です。こんどはイミグレーションではなくて、税関です。鳩を持ち込む書類がなかったのです。「ボクの鳩がなければ、ボクのアクトはできません。なぜなら、ボクの鳩はボクのアクト用にトレーニングされていたからです。とくにオープニングとケーンの上への出現が問題でした。ですからこれらの鳩がなければ、トゥナイトショーには出演できないのです」そこで島田は一計を謀ることにしました。税関の鳩をすり替えようというのです。「ボクはディアナに、普通の上着に4つの鳩用のポケットをつけさせました」

すり替え用の鳩はゴールドフィンガーから借りました。島田はまさに犯罪を犯しに税関に向かいました。「ディアナとボクは税関の保管地区に行きました。"こんにちわ、ボクの鳩を預かってもらっていますが、大丈夫かどうか調べにきました"といました。鳩は60cm四方の鳥かごに入れられていました。その中には10羽の鳩がいました。係官は言いました。"私が面倒を見るから心配はいらないよ。書類が揃い次第、ちゃんと返すから"と。

彼はちょうど私の正面にいたので、このままではどうすることもできません。しょうがないのでとにかく鳥かごを開きました。そして必要な2羽を見つけ、カゴの隅に置き、他の1羽を取り、その鳩の翼をめくって言いました。「すみません。ちょっとまずいのがいます。パウダーか何かないですか」彼はパウダーを探しに行きました。彼が後を向いた瞬間に、ボクはポケットから1羽をカゴの中に入れました。これがバレたらたいへんです。私の生涯の中で、絶対に失敗したくないトリックでした。30秒ほどして彼が戻ってきました。「パウダーはなかったけど、心配はいらないよ。私が面倒を見るから」そのときはすでにすり替えは済んでいました。ディアナは"早く行こう、行こう"とボクをせき立てました。



Photo: Zakary Belamy



## ドラゴンの誕生

その後の18年間、島田の幸運は続きました。いまやアメリカは、両手を開いて島田を迎えます。グリーンカードという永住権と仕事をする権利を得て、彼は堂々とトゥナイトショーに向かいました。そしてつぎはラスベガスが待っていました。「ボクはシュラインオーディトリウムでローズマリー・クルーニーと仕事をしました。その仕事をデューンズのオーナーが見て、カジノ・ド・パリで使ってくれることになりました。そのときデューンズではカジノ・ド・パリ、トロピカーナでフォーリー・ベルジュールが行われていました。それとリド・ド・パリがベガスの3大ショーでした。ボクがカジノ・ド・パリで仕事を始めたのは、ちょうどシークフリード&ロイがリドで仕事を始めた年と同じ年でした」

島田はラスベガスという大舞台を得て、何かを変えなくてはならないと考えました。傘のアクトで彼は日本の文化的なものを取り入れました。「サムライのキャラクターが傘のアクトに調和しました。でも何かインパクトがあるものが必要だったのです」そして彼は、その解答を、彼の誕生年に見いだしたのです。彼が生まれた1940年は、「辰年」でありました。

島田のドラゴンへの興味は、1970年の東京EXPOのショーを見たときに始まりました。伝統的な踊りのショーの中に、ドラゴンが出現するのです。「ドラゴンが登場しました。悪いドラゴンの話です。村の人々はドラゴンに生け贄をささげなくてはなりません。そのとき、そこに勇者が出てきて、ドラゴンと闘います。そんなストーリーですが、それを見たときは、マジックとの関連性は思いつきませんでした」

その後、ポロックと話しているとき、傘のアクトに関してひらめくものがありました。「あれはとても美しいアクトだけど、何か欠けているように思うんだ。それが何であるか、何であるべきかはわからないけどね」とポロックは言いました。

1975年になって、島田は欠けていたものをはっきりと言葉で指摘できるようになりました。「あのアクトには、ストーリーづけがされていなかったんだ」と。傘のアクトには、少しのドラマ的要素が必要で、美しさを生み出すだけでなく、見る者の感情に働きかけるものが必要だったのです。もっと大量の傘を出すとか、もっと大きい傘を出すということではありません。このアクトは東洋の幻想を表現するものです。その答はドラゴンにありました。ドラゴンが現れることが、傘のアクトを見事に締めくくるものでありました。道具を制作するには、日本の職人の腕を借りる必要がありました。結局、陰干しにした和紙を使って、3体ドラゴンが作られました。

とうとう、島田は彼独自のアクトを完成することができました。「ボクのアクトはまるでインプレショニストのようなものです。それは天海のテクニクに基づいています。天海の影響を受けたのです。ポロックの影響も受けました。マジシャンにはパーソナリティがなくっちゃいけないけど、ボクは日本人で、しかも西洋にいる日本人であるということが、たいへんラッキーでした。それだけで自動的に他のマジシャンと違うのですからね。ボクが親から受け継いだものを使い、それを最大限に生かすべきなんです。ということで、ボクはボクの色を作っているんです。そしてスペシャルなエンタテイナーになりたいんです」



左後列：ブラックストーンJr.、島田、デビッド・カッパーフィールド  
前列：マーク・ウィルソン、リチャルディ、ダイ・パーノン



島田とチャニング・ポロック (左)





Photo: Zakary Belamy

## 大成功のはじまり

スペシャリストであることは、1981年に報いられました。島田は生涯で最高の契約をオファーされました。リベラッチのショーのスペシャルゲストとして出演する機会を得たのです。

「ボクはショーの中で2度アクトを演じました。鳩出しと、傘とドラゴンのアクトです。ショーのフィナーレでは、リベラッチが登場して、ロールスロイスを舞台に呼び寄せます。彼が"私のショーのスペシャルスター、島田です"と言って、車のドアを開けます。そしてボクが現れ、もう1本の傘を出現させます」マジシャンにとってこれほどやりがいのある仕事はないでしょう。ただやりがいがあるだけでなく、彼の評価を高める仕事です。リベ

ラッチのショーに出て以来、島田の名前は世界に知れ渡りました。リベラッチとの契約を終えると、地球上のいたる所で島田に対する需要が起きました。彼の家はハリウッドにありましたが、彼はほとんど家で過ごすことはありませんでした。シークフリード&ロイがリドのショーを休むときは、彼が代役として出演しました。もちろん、ヨーロッパの一流劇場にも何回も出演しました。しかし彼がひとつの仕事に落ち着くのは、1988年のことでした。ラスベガスのリビエラホテルの'スプラッシュユ'というショーが、新しいスペシャルゲストを捜していたのです。そのショーのリビエラのオーナーがリベラッチのショーでの島田をおぼえていて、1年間の契約を与えてくれました。その1年はけっきょく5年になりました。島田の評価はそのことで確固たるものとなりました。



リベラッチと島田、ラスベガスのヒルトンホテルにて (1982)

## マンネリからのエスケープ

しかしその5年が経過してみると、彼はマジシャンとしても、個人的生活も物足りなくなってきました。同じことを繰り返す毎日からは、興奮は消え去りました。「ボクは生涯ずっとエンタテイナーでしたから、観客を楽しませるといふ気持ちは失いたくありませんでした」そういう気持ちを失いかけた人のとるべき行動は、飽きたことに終止符を打つということに他なりません。「ボクは日本に戻って、気力を回復しようとしたんです。ディアナはアメリカに残ることに固執したので、二人は別れました」

日本に戻った彼は、日本のマジックコミュニティに大歓迎されました。島田が長く日本にいと知った人たちは、彼にレクチャーツアーをアレンジしてくれました。「これはボクにとって素晴らしい期間でした。長年離れていた日本の各地をまわったのです。北海道から九州までいたる所です」日本のマジシャンにとって、島田が帰ってきたということは、夢が実現したようなものです。

彼らのほとんどは、島田のマジックを昔のテレビのビデオとか、DVDなどでしか見ていなかったのです。「彼らはボクを神様のよう扱ってくれました。どこでも最高の歓迎ぶりでした。ボクは天海以来の偉大なマジシャンになった気分でしたよ。本当にすごかった。あの人たちはどんな気持ちだったんでしょうね。想像もつきません」レクチャーツアーは崇拜されたという高揚感だけではなく、将来はマジックを指導することによって、彼がマジックで作上げたものを後世に残したい、という気持ちを抱かせることになりました。

しかし日本でそのようなひとときを過ごしたことは、ほろ苦い思い出となります。少しの間、年老いた母親の面倒を見ることもできました。でもマジックで仕事をしようということになると、彼はまるで陸にあがった魚のようでした。「すでにナイトクラブとかキャバレーはなくなっていました。バーなどで小さな仕事はありますが、それらは若いマジシャンには良い仕事かもしれませんが、ボクの名前と名声にはそぐいません。そのような仕事をしたらボクの価値が下がります。ですからボクは困ってしまいました」島田がマジックを演じ続けるには、アメリカに戻るしかないことがわかってきました。しかしスプラッシュの5年間は、彼のエネルギーを吸い取ってしまいました。そこで島田は、エネルギーを取り戻すために、すでに完成した手順一部をリフレッシュすることにチャレンジしたのです。

## マジックを教える

そのころ彼は母親の家のそばに住んでいて、マジックを指導する考えをもて遊んでいました。マジックの学校を作ろうとも考えましたが、スポンサーが見つからず、それは実現しませんでした。そこで彼はマンツーマンで教えることに方針を変えました。1997年、島田は'マジックの個人レッスン'を始めました。その年は6人の生徒にうまく教えることに成功し、そのあと合計で23名に教えることになりました。生徒の中には、アマもプロもいました。

彼はユニークな手順をクリエイトするための彼独自の哲学を持っていたので、彼は自分の秘密をすべて生徒に教えました。「マジシャンは、ひとつのトリックをやっただけでは駄目なんです。手順が必要なのです。ちょっとしたストーリーも必要です。あなたのやること理由づけがなければいけません。それがあなたを他のマジシャンと区別するものなのです」この島田の考え方が、鳩出しさえも、すべて教えても問題なかったことに関係してきます。教えることが問題であるどころか、彼は教えることを愛しました。生徒はこの名人と1週間を過ごし、すべてを教わります。すべてのテクニック、道具、コスチュームまでもらいます。島田はそれぞれの生徒にあったストーリーさえも提供しました。「あとで自分で変えてもいいですし、新しいものを加えることもできます」では、マジックの個人レッスンがうまくいって、島田のマジックを受け継ぐ人が現れたからといって、彼はマジックを演ずることをやめてしまったのでしょうか。そのようなことにはなりませんでした。

## アメリカへの復帰

1988年、彼はIBMコンベンションにおいて、アメリカへの復帰をはたしました。傘とドラゴンを彼の新しい妻、キーリーとともに華々しく披露し、スタンディングオベーションを受けました。



この1回の出演が、アメリカ中のメジャーなコンベンションすべての出演と、16年ぶりのマジックキャッスルへの出演を決定づけました。しかし島田はそれで満足したわけではありません。彼は言います。「ひとつの仕事をするとき、ただ慣れた通りにやるのではなく、つねに新しい何かを考えなくちゃいけないのです。最後の仕事こそが、あなたの評価となるからです」その言葉を裏づけるかのように、島田はいまだに世界中に需要を抱えています。彼は自分がまだゴールに到達していないのだと言います。そして、不断の努力の大切さを強調します。

## マジックはアート

すべてのメジャーなマジックの賞を獲得した男。その賞の中には、マジックキャッスルのマジシャンオブザイヤー、日本での天海賞と、天洋賞、さらにルイス・タネン賞、それらをすべて獲得



してもなお、高い野望を持っています。「あなたはトリックをうまく演じればマジシャンになれるでしょう。しかし、ボクはアーティストになりたいんです」この言葉は、彼を際立たせるものです。彼のようなマジシャンは他にいないのです。ですから、競争相手はいません。「他人がやらない自分のオリジナルなものができれば、それが受け入れられる場所は必ずあります。自分自身のショーを持てればよいと夢見たこともありましたが、でも自分で何もかもできるわけではありません。だからボクはスペシャリストのままがいいんです」



Photo: Zakary Belamy

## マジックの将来

島田の口調は熱をおびてきます。「マジックはもちろん時代とともに変わるべきです。しかし、最近マジックをテレビで見ると、マジックが普及したという気持ちと、残念な気持ちが混ざります。ボクはあまりにもカメラトリックが使われ過ぎていることを危惧します。たしかにショックを与えるには役立ちますが、同時にマジックをつぶすことにつながると思います。一般の人たちから見ても、本当にできるはずがないことが感じられると思います。そのような間違ったマジックの見せ方が続けられるとしたら、若いマジシャンはどのような希望を持ったらよいのでしょうか。もしもカメラトリックとコンピューターグラフィックスがテレビマジックのスタンダードとなったとしたら、スライハンドアーティストの存在価値はあるのでしょうか。誰も技術を極めようなどとは思わなくなるでしょう。それは、ボクからすれば、マジックの終焉です。あなたがそれをライブでできないのなら、それをテレビでやってはいけません。古典的な方法が、未来永劫続く方法なのです」

## 生まれ変わった島田晴夫

島田晴夫は、2000年に還暦を迎え、日本の考え方では、彼はいま生まれ変わって7才ということになります。しかも彼は2001年から酒を飲むことをやめ、まさしく生まれ変わりました。こんどの人生は、十分な知識と経験を持っているので、やることひとつひとつを楽しんでやっているようです。彼はいまだにボールをマニピュレートし、鳩を消し、傘を出現させています。しかもいまだにしゃべらずにやっています。「ボクは舞台ではいっさいしゃべりません。ボクがしゃべったらインターナショナルな雰囲気は消えてしまいます。しかも変なアクセントでしゃべったら、それだけでボクからミステリーが消えてしまいます。それはボクのキャラクターに合っていないのです」その代わり、彼は言いたいことを手で表現します。「スライハンドは言葉のようなものです。手順を作るということは、言葉をつなぐようなものなのです」

過去の50年間、彼の手が話した言葉が世界中に響きました。それはクラシックなやり方でした。「クラシックなやり方は、なくなることはないのです」彼の手がしゃべらなくなったとき、それは引退すべきときであることを、彼はちゃんと知っています。でもその日は当分まだ先ようです。あなたはまだ島田の指先にエネルギーを感じ、目の中にするどさを見ることができるでしょう。そのことは、彼の普段の笑顔からもうかがえます。

最後に島田に聞きました。「あなたの墓に何て書いてもらいたいですか？」

島田はつぎのように答えました。

"Shimada was pretty original, wasn't he?"

その言葉が刻まれる日まで、隣の部屋の鳩たちは鳴き続け、もうすぐ島田のポケットに入れられるのを覚悟し、つぎの世代の若者を驚かせるのに一役かうのを待っているのです。

「島田晴夫」

発行：2008年9月21日

著者：Jaq Greenspon (ジャック・グリーンズパン)

翻訳：加藤英夫

日本語版制作監修：株式会社テンヨー

写真：表紙および近影のものは、フランスの写真家Zakary Belamyによるものです。

発行：株式会社テンヨー

〒135-8389 東京都江東区千石2-8-11

Special Thanks: Richard Kaufman (GENII)

<http://www.geniimagazine.com/>